

表と裏

「土曜寸言」2003.06.07

「光と影」「表と裏」「ソフト」などというワード、私たちが二つ対立する概念に分けて世界を解釈する世界論。二元論は、二元論的見られる観念である。宗教に分離して言えば、「聖」と俗を分離して、聖なる空間家としての寺院や、聖なる専門家としての僧侶が、世俗社会から分節されて、特別な意味を付与されている。ただし、イラク戦争で一躍有名になったスニ派イスラームのよいうに、聖と俗を分離せず、寺院も持たず、僧侶も無く、世界の隅々まで神の恩寵で満たされていくと、一元論的認識を基本とする一元論的ある。こうして宗教観の人々と、全く異なる二元論的世界観を持つアメリカ人が戦うなどするから、話がややこしくなるのである。エル・エンデは、二元論的に分離された一方の空間、上述の「影」や「聖」と認識されているいわゆる「裏側の世界が枯れ果てて、そのために「表」の世界が枯渇してきている」ということを主題にして多くの作品を残した。たとえば、『はてしなき物語』では、裏の世界「虚無」と

いう悪魔に蹂躪され、その夢が語られ、希望が失われ、この世の聖と俗の分離は、近代的な武装した二元論的強固な再武装した空想の強い意向を強いる。この聖なる空間を強引に押しやる。その向こうの聖なる空間でせつと、専門家は俗なる空間でせつと、人々をたぎらせること、欲望をたぎらせること、結果は、聖なる部分である。その結果は、聖なる部分を撒き散らした。こり、包装の自動車を連ねたり、白装束の「聖」が出現したり、他方、聖なる空間に踏み込んでブルドガーで土を掘り起こしたり、クレーンでタリに爆弾を攻撃したり、隠れていた悪魔が目を覚まして、世俗世界に攻撃をかけた。SARSはそういう類のものだと筆者は思っている。エイズは、その歴史も古く、アフリカ大陸の奥地に長い間息を潜めて潜伏していたものである。それが前世紀の末に至つてこつ然と表の世界に姿を現した。世界を震撼させているSARSの故事来歴について、今のところ不明だが、自然破壊による宿主の不在または喪失が最も疑われている。裏の世界を破壊した人類の暴挙をエイズやSARSは怒りと共に警告しているのである。